

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

グリーンマイル

2000 (平成12) 年4月9日鑑賞

Data

監督：フランク・ダラボン

出演：トム・ハンクス/デヴィット

ド・モース/ボニー・ハント

/マイケル・クラーク・ダン

カン

👁️👁️ みどころ

ちょっと奇抜なところもあるが、泣ける映画。
アメリカの死刑制度もいい勉強に。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<史上最強の犯罪ドリームチーム>

この作品は、2000 (平成12) 年の話題作で大ヒット作だ。

当時、私はある新聞社と映画評論執筆の話をしており、そのテストケースとして、「グリーンマイル」をとりあげて、次のような原稿を書いた。残念ながら、これは新聞掲載とはならなかったが、その時に私が書いた、映画「グリーンマイル」の映画評論をそのまま転記する。

弁護士の目からみた映画評論

弁護士 坂和章平

2000 (平成12) 年5月記

——「被害者の人権」と『グリーンマイル』——

トム・ハンクス主演の『グリーンマイル』が大ヒットしている。作品賞をはじめ、観客の涙を誘う黒人の大男マイケル・クラーク・ダンカンの助演男優賞など4部門にノミネートされた第72回アカデミーは惜しくも逸したが、今年1、2を争う秀作だ。

舞台は1935年、大恐慌時代のアメリカ南部の死刑囚を収容する刑務所。主人公ポールは善良なる看守主任。グリーンマイルと呼ばれ、処刑室へ送られる死刑囚が最後に歩む緑色の廊下—ポール達看守は、神から与えられた職分であるかのように、死刑囚をその廊下に導き、電気椅子による死刑の執行を忠実にやっている。死刑囚と看守との心の触れ合いを描いた異色の感動作だ。ちなみに日本では刑法11条1項の「死刑は、監獄内において、絞首して執行する」との規定および明治6年太政官布告第65号により、死刑の執行は絞首刑と定められているが、アメリカでは電気椅子に死刑囚を座らせ、「死に至るまで電気を流す」ことによって死刑を執行している。

ポールの元にジョン・コーフィという黒人で大男の死刑囚が送られてきた。彼は双子の少女を殺害した罪で死刑囚となっているが、物語の後半まで、その「犯罪」の真実は伏せられる。ジーザス・クライスト（イエス・キリスト）と同じ頭文字（J・C）のこの大男は、いかつい外観とは裏腹に、子供のような純真な心を持ち、「神の子」であるかの如き奇跡を行う。難病に苦しむポールを癒し、また映画の中で貴重な役割を「演ずる」「ミスター・ジンクルズ」と名づけられたネズミを生き返らせる。キリスト教的素養のない日本人には、これらの奇跡のシーンは当初唐突に思えるが、物語の進行と共に、コーフィによる己の生命を犠牲にした「奇跡のワザ」への違和感は薄れていく。ポールを中心とする善良で職務に忠実な看守達とコーフィとの心の触れ合いを見て、観客は最後には涙を流さずにはいられない感動を覚えてしまう。

本来のストーリー展開とは別に、弁護士として私が注目したいのは、第一に電気を身体に通じやすくするため、死刑囚の頭に水を含んだスポンジを載せるなど、忠実に描写される死刑執行の場面だ。職務とはいえスイッチを押す看守の気持の「重み」を考えさせられるとともに、悪役として登場する看守パーシーが、意図的に水を含ませないスポンジを置いて死刑を執行する場面のむごさには思わず目を覆ってしまう。第二の注目点は、死刑執行の場に被害者の両親が立ち会うことだ。これは日本では到底考えられないことだ。被害者の立場（人権）の尊重が、たちまち死刑執行への立ち会いに結びつくものではないが、とにかくすごい制度だ。陪審制を当然のものとし、国民が直接司法に深く関与する「アメリカならでは」の制度だが、その起源や意味合いについて十分勉強し議論すべきだ。

今、日本では司法改革が注目され、法曹人口の拡大の他、法曹一元の推進、ロースクール構想や陪審制・参審制の導入などが議論の焦点となっている。またオウム事件や多発する凶悪少年事件を契機に、加害者・被告人の人権だけでなく、従前軽視されがちだった被害者（遺族）の人権の尊重が叫ばれ、いくつかの制度の改善も進んでいる。「自力救済の禁止」は近代国家の当然の原則だが、被害者の「泣き寝入り」の多発は法の不備といわざる

を得ない。

「死刑の執行」という最終の「儀式」のシステムは、それぞれの国の歴史・宗教・国民性など多種多様な要素から決定されているが、その当否の議論は少ない。有罪を確信する双子の少女の両親からの罵倒を浴びながら、奇跡の力をもつ「神の子」コーフィの身体に電流が流れるシーンは、周囲のすすり泣きの声とは別に、死刑執行のあり方について、あらためて考えさせられる。こんな目で『グリーンマイル』を観るのも一興だろう。